

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2026 春 vol.156

特集

民俗学者 橋本鉄男がみた近江 —滋賀民俗研究のいしずえ—

私の出版体験

『小房見聞録』

郷土の“見聞録”を次代へ伝えたい

INFORMATION STATION 催し案内 2026 春

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

民俗学者 橋本鉄男がみた近江

—滋賀民俗研究のいしずえ—

ギャラリー展示「民俗学者 橋本鉄男がみた近江」琵琶湖博物館企画展示室
会期：2026年3月17日～5月24日



琵琶湖博物館
資料目録

20号 2026年3月

橋本鉄男旧蔵資料

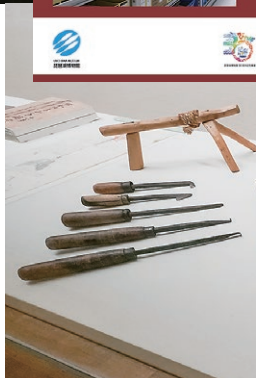
滋賀民俗研究の先覚者とその足跡



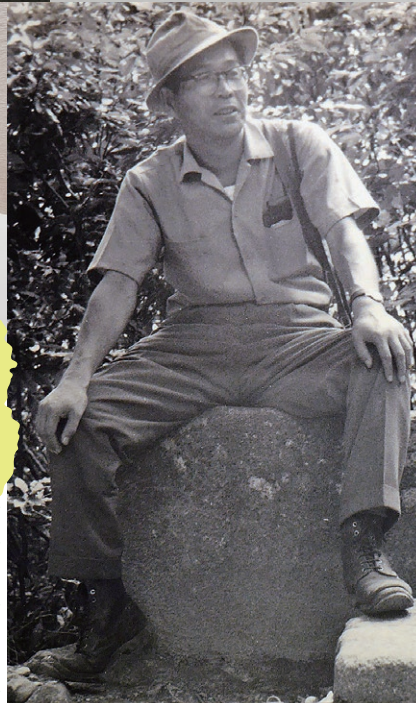
米田実・加藤秀雄編
『琵琶湖博物館資料目録20号
橋本鉄男旧蔵資料
滋賀民俗研究の先覚者とその足跡』
(滋賀県立琵琶湖博物館、2026年)

滋賀県を代表する民俗学者・橋本鉄男の研究資料を
ととして、その生涯と研究を紹介するギャラリー展示
が滋賀県立琵琶湖博物館で開催されています。

担当の加藤秀雄学芸員、資料の整理を担当した米田
実さん、その著書を刊行していたサンライズ出版の岩
根順子にお話を聞きました。



橋本鉄男の収集した
木地屋の用具類



橋本鉄男

(1917～1996)

はしもと・てつお／滋賀県高島郡今津町(高島市)生まれ。1939年、関東局立旅順師範学校卒業。旧満州国、滋賀県下の教職に従事。1973年退職。滋賀県文化財保護審議会委員、国立民族学博物館国内資料調査委員、日本民俗学会評議員、近畿民俗学会代表理事などを歴任。木地屋とろくろ研究所所主宰。第11回滋賀県文化賞、第35回京都新聞社文化賞、第11回風土研究賞、平成6年度地域文化功労者文部大臣表彰を受賞。1995年、勲五等瑞宝章受章。おもな著書に『木地屋の移住史・第一冊』、『ろくろ』『木地屋の民俗』『日本の民俗・滋賀』『琵琶湖の民俗誌』『藁縄論』『柳田國男と近江』などがある。

滋賀県立琵琶湖博物館

住 所 草津市下物町1091

連絡先 TEL 077 (568) 4811 FAX 077 (568) 4850

休館日 月曜日

観覧料 常設展示：大人840円、大学生470円、小・中・高校生 無料
※企画展示をご覧になるには別途料金が必要です。

アクセス JR琵琶湖線「草津駅」西口から近江鉄道バス「びわこ博物館」行きで「びわこ博物館」下車／名神「栗東IC」から車で約30分、名神「瀬田西IC」または新名神「草津田上IC」から車で約35分

滋賀県立
琵琶湖博物館

論文や本の制作過程の始まりから 終わりまで、全部の営為が残っていました。

遺品の寄贈から整理まで

—平成8年（1996）にお亡くなりになって、その遺品がご遺族から寄贈されたわけですね。

加藤 2回に分けて資料が来ています。まずお亡くなりになった翌年の平成9年（1997）に蔵書を中心とした寄贈があ

り、平成27年（2015）に、あらためてご遺族から依頼があり、残りの蔵書とそれ以外の研究資料が当館に移動されました。

蔵書の整理はできませんが、研究資料は調査の時期や目的を確定しながら再構成する必要がありますが、なかなか進まなかったのですが、令和4年（2022）から米田さんに研究協力員として来ていただけたことになって、3年かけて目録を完成することができました。

米田さんが橋本先生とお出会いになったのは、いつごろですか。

米田 橋本先生との出会いは、昭和50年代の終わりで比較的遅いんです。一緒に県内や京都府下を歩きました。ただ妻の実家が高島で、その両親が橋本先生と同じ教員だったことから、親しくしていただきました。それが今回整理を担当した動機にもなりました。

加藤さんからお話をいただいて、滋賀県立大学で民俗学を教えておられる市川秀之さんと一緒に来館して拝見したら、その質と量に驚きました。地方研究者が遺したものとしては、全国的に見ても稀な研究資料だと思います。整理するために原稿類を見始めると、改めて、橋本先生の見通しの長さ、視野の広さに驚かされたんです。

最後の本にあたる『私のトルヌス』は昭和20年代から平成までに発表なされた短い文章で構成された一種の自

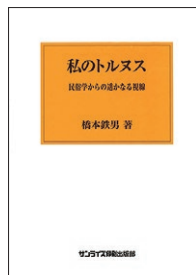
分史ですが、読むと滋賀の民俗学の流れがよくわかります。滋賀の民俗を学びたい人はぜひ読んでほしいですね。

岩根 小社の本をお薦めいただき、ありがとうございます。ただ、本書は絶版ですので、古書か図書館でお探しください。原稿をいただいたとき、「トルヌスって、なんですか？」とお尋ねしたので覚えています。ラテン語で「轆轤」の意味で、英語のツアー（旅）の語源だと教わりました。

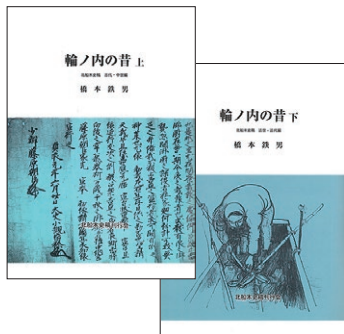
岩根社長の橋本先生との最初の出会い、いつごろになるのですか。

岩根 平成元年（1989）に、お住まいだった安曇川町北船木の字誌である『輪ノ内の昔 北船木史稿』という本を、小社で制作しました。その2年ぐらいい前に、先生から直接お電話があり、この本用の原稿用紙をつくってほしいという注文をいただいたのが最初です。

『輪ノ内の昔』の本扉や『私のトルヌス』の表紙は自身でデザインなさったんですよ。全部、方眼紙に描いて、切り張りして。



『私のトルヌス 一民俗学からの逢かなる視線—』
(サンライズ印刷出版部、1996年)



『輪ノ内の昔 一北船木史稿—』(上)・(下)の本扉
(北船木史稿刊行会、1989年・1991年)



サンライズ出版
代表取締役
岩根順子

いわね・じゅんこ／1948年滋賀県彦根市生まれ。



元甲賀市史編さん室長
米田 実さん

よねだ・みのる／1959年滋賀県大津市生まれ。



滋賀県立琵琶湖博物館
主任学芸員
加藤秀雄さん

かとう・ひでお／1983年大分県別府市生まれ。

米田 先生は絵心をお持ちでした。
岩根 そうなんです。それから、毎月ぐら
 い「自宅にうかがって、その原稿の話など
 をお聞きするようになりました。行くと、

中学校の郷土研究クラブで生徒たちとともに調査

——橋本先生のお生まれから研究業績まで、
 順を追ってお話しいただけますか。

米田 先生のフィールドワークには、はっ
 きりとした傾向がありましてね、簡単に言
 うと「山と湖」なんです。山は木地屋^{きじや}で、
 湖は琵琶湖沿岸の漁業者。あまり平地の農
 村は対象になさいませんでした。これは、
 今津の湖畔に生まれて、安曇川^{あづみ}河口の北船
 木というたいへん特色ある場所にお住ま
 だったことも影響するのかと思います。

岩根 ええ、独特ですね。あそこから見
 る琵琶湖は、彦根の側から見ている琵琶湖と
 は全然違うように感じました。

米田 まさに「輪ノ内」なんですね。橋本
 先生の民俗学は、当時通用の民俗学ではな
 くて、対象となる場所の地域史と深く関わ
 らせて語る手法でした。

岩根 旧制の今津中学校を出て就職なさつ
 た森五商店は近江八幡出身の近江商人です。
 東京支店だそうなので、改修を重ねて現在
 も残る近三ビルディングの建物で働き始めた
 ことになりましたが、「意に沿わず」3か月
 余りで退職なさっていますね。

米田 それで、愛知郡西小椋^{さいせいか}尋常高等小学
 校の代用教員を半年務めてから、海を渡っ
 て旅順師範学校に入学します。

師範学校の『研究紀要』に「土佐日記小論」
 を寄稿しており、満州での訓導時代には同
 人誌をつくっておられる、いわゆる文学青
 年だったのですね。師範学校の校長先
 生から届いた「君の反抗的精神は尊いけれ
 ども、もっと世の中になじまんといかん」

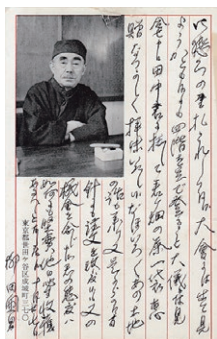
2 時間でも3 時間でもお話しただいて
 とにかく、何か言うと、すつと本が出てく
 るのが不思議でした(笑)。

といった内容の手紙も残っていました。学
 業優秀だったので、期待する所が大きかつ
 たようです。

——昭和18年(1943)に高島郡北船木
 の橋本家に婿養子として入られ、姓が清水
 から橋本になります。

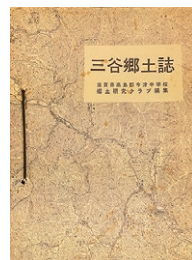
戦後は高島郡内の中学校で社会科を教え
 ながら、民俗学者としても活動なさいました。
 加藤 昭和21年に高島郡の教員に呼びかけ
 て歴史研究会を結成し、同時期に日本の民
 俗学の祖とされる柳田國男^{やなぎたにくにお}の主宰する「民
 間伝承の会」(のちの「日本民俗学会」)に
 入会しています。昭和25〜35年の間に柳田
 が橋本に送ったハガキ6点があり、当時、
 橋本が調査していた大將軍^{たいしやうくん}信仰について
 や研究のアドバイスなどが書かれています。

米田 これは特に日本民俗学の特殊性でも
 あるのですが、柳田を中心とした「民間伝
 承の会」が、全国各地のアマチュア研究者
 を指導したり、励ましたりしながら、調査
 研究を進めていたわけです。橋本先生もそ



柳田國男書簡
 (昭和34年10月27日付)

※1 柳田國男(1875〜1962) 兵庫
 県生まれ。農商務省官僚、民俗学者。日本
 民俗学の確立に尽力した。著書に『遠野物
 語』『蛸牛考』『民間伝承論』など。



『三谷郷土誌』
 (三谷郷土誌刊行会、
 1967年)

うして柳田と面識を持ち、書簡のやりとり
 などを通じて研究者として成長した一人で
 した。

加藤 昭和30年代末から40年代初めにつ
 けては、今津中学校の郷土研究クラブを指導
 なさって、旧三谷村^{みた}(昭和30年に今津町と
 合併)の民俗を調査した『三谷郷土誌』を
 刊行なさいました。民俗学史的にも重要な
 資料です。

——昭和のこの頃というのは、中学や高校
 の文化部のレベルが高いですね。

米田 昭和30年代生まれの私たちの世代に
 は、橋本先生のようなすぐれた指導者が小・
 中学校、高校にいて、そこで郷土研究の体
 験を積んでから大学で日本史や民俗学に進
 んだ者が多いんです。

私も中学、高校と郷土研究部に入ってい
 て、そのなかで民俗学を知りました。だか
 ら、地域の歴史を明らかにする一つの方法
 として民俗学をとらえてきました。橋本先
 生の指導を受けた生徒たちもふるさとを知
 るよい経験をしたと思います。

加藤 この本について、宮本常一^{みやもと じょういち}が『日本
 読書新聞』に書評を書いており、「指導教
 官である橋本鉄男氏」は「滋賀県きつての
 フォクロリスト」であると書いてあります。

米田 橋本先生は近畿民俗学会などを通じ
 て宮本と面識があり、宮本は、翌年刊行さ
 れた『木地師の習俗』(滋賀県部分を橋
 本が執筆)も書評を書いています。

——本書掲載の写真やネガ類なども、寄贈
 された資料にふくまれるのですか。



A



B C



D G



E F H



橋本鉄男の撮影した写真

- A** 手引き轆轤 (旧朽木村、昭和39年頃)
かつらがわきき じくぎ
- B** 民家 (大津市 葛川木戸口町、昭和35年代)
- C** 棚田 (大津市 仰木、昭和20～30年代)
おき
- D** イタダキと呼ばれる柴や割り木の女性による運搬法 (大津市大石曾東町、昭和39年)
おおいし じづか
- E** 男性の山仕事着 (多賀町 大君ヶ畑、昭和33年)
おじがはた
- F** 女性の仕事着 (東近江市 君ヶ畑町、昭和38年)
きみがはた
- G** ヒラタ船。丸子船より小型だが、ダテカスガイが施されている (大津市今堅田町、昭和20～30年代)
- H** 釣り漁師の船。船首にウエ (漁具の一種) を積んでいる (大津市今堅田町、昭和20～30年代)

加藤 著書に掲載されている写真はほんの一部で、写真だけで一万点近くあります。データベース化して展示と同時にぐらいのタイミングで順次公開していきたいと考えています。撮影地などの情報のなかったものについても、ほぼ米田さんが同定してくださいました。

米田 昭和20・30年代の山村の写真などを見ると、言い方が逆かとは思いますが、「こ

木地屋の民俗

※2 宮本常一（1907～1981）山口県生まれ。民俗学者。著書に『忘れられた日本人』『日本の離島』など。

こは同じ日本なのか？」と感じます。その変わりように啞然とするぐらいなので、非常に貴重な記録だと思います。お祭りなどの特別な行事を撮ったものは昔から多いですが、ふだんの暮らしぶりは、なかなか撮影されることがないので。

——昭和30年代は、郷土クラブの指導とは別に、朽木村の木地山や東北地方に移住した木地屋の調査などを行っておられますね。

米田 最初に言った橋本先生のフィールド

「山と湖」の山のほうです。橋本先生は、「木地屋」として調査してきたのに、出上がってきた国の報告書では「木地師」の語が使われていたことに納得がいかなかったそうです。民俗としての木地職は、「木地師ではなくて木地屋だ」と、ずっと主張しておられました。歴史的位置付けが先生の中に確固としてあったので譲られなかった。

岩根 あれは子孫の方が「木地師」という呼び方にこだわられたんですね。

米田 「木地師」と呼んでほしいという思いがあったんです。「屋」よりも「師」の方が上という認識は、すでに江戸時代の後半ぐらいから存在しました。研究者もそれに同調する人があった。だから難しかった。加藤 木地屋が椀（わん）などをつくるのに用いる



『ろくろ ものと人間の文化史 31』
(法政大学出版局、1979年)

轆轤（ろくろ）に関しては、昭和50年代半ばに出版された橋本先生の『ろくろ』が、今でも読みやすいし、勉強になりますね。

米田 あの本は、よく売れたと聞いています。それまでは、趣味の延長のような研究が多かったのですが、実に画期的でした。

晩年、同じシリーズで「木地屋」も書く予定だったそうですが、間に合いませんでした。

岩根 最近でも、滋賀県以外の木地屋のことを題材にお書きになっている自費出版物をかなり見かけますね。

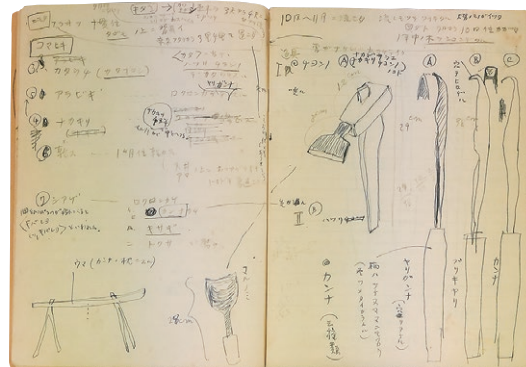
琵琶湖の民俗

——もう一方のフィールドが琵琶湖ですね。

加藤 昭和30年に行われた「琵琶湖沖ノ島学術調査」に参加なさったのが漁撈民（ぎょうろうみん）に注目なさった最初で、昭和40年代にも「琵琶湖民俗資料緊急調査」で本堅田（ほんかた）の調査などを行っておられます。

もっとも長期にわたったのは昭和53年（1978）から始まった「琵琶湖総合開発発地域民俗文化財特別調査」にたずさわられた時ですね。

——この琵琶湖の漁撈に関する特別調査は5か年計画で実施されたすごいものだったのですね。パネルの解説文には、「空前絶



↑堅田町 葛川貴井（現大津市葛川貴井町）での
木地屋の調査ノート（1958年）

加藤 自分のルーツにかかわっているのに関心のある方は多いでしょうね。展示もしてある『手引ろくろの文化史』（吉川弘文館、2021年）という本の著者の小椋裕樹（こぐらゆうき）さんも祖父の代まで木地屋だったという方です。橋本先生の本を読んで交流されるようになり、新潟県糸魚川市の市役所職員を定年後に神奈川大学大学院で研究なさって、その本をお書きになりました。

——後のスケールとあります。

米田 琵琶湖総合開発への対策の中で、埋蔵文化財の調査と同時に民俗文化財の調査が、滋賀県文化財保護課の長谷川嘉和（はせがわよしかず）さんの主導で進められました。「琵琶湖調査」と呼ばれ、学界でも有名です。

これは、橋本先生自身も書いておられますが、参加者も著名な方が多く、滋賀県の民俗学にとっては大きな転換点でした。

もともと民俗調査は、それまで橋本先生もふくめ別に職業を持っている人がアマチュアとして取り組むケースがほとんどでした。

それがだんだん大学で専門教育が行われるようになり、行政の面でも文化財保護の取り組みが、昭和40年代からまずは埋蔵文化財の分野で始まって、やがて民俗文化財にも及んでいきました。

最初は埋蔵文化財なんですな。

米田 滋賀県では昭和37年（1962）に県の教育委員会に水野正好^{みづののまさよし}さんが技師に採用されて、さらに昭和45年（1970）には滋賀県文化財保護協会が設立されます。埋蔵文化財Ⅱ考古学の分野の発掘調査などを県から委託されて行う団体です。

一方、民俗のほうは、水野さんと旧知であった菅沼晃次郎^{すがぬま けいじろう}さんが昭和38年（1963）に設立なさった滋賀民俗学会が発展し、昭和40年代には滋賀県から委託を受けて廃村などの緊急民俗調査を行うようになりました。

やがて民間の研究者や研究団体が退潮し、かわって民俗文化財にたずさわる行政担当者や大学に籍を置く研究者が増えていく、私もその一人ですが、市町にも文化財担当者置くようになった。歴史民俗資料館もできる。琵琶湖調査はそういう大きな変化の時期に行われたわけですね。

橋本先生のお仕事は、戦後の日本で民俗学が民間の学問だった時代と、行政やアカデミズムの研究者が担う体制が整ってきた時代の両方にわたっていますが、そうした流れの中で、時代の変化に合わせながらご自分の研究を絶えずブラッシュアップしていかれた。立派だと思えます。

なるほど。そういった背景が。

米田 琵琶湖の民俗に関しては、『近江の海人—ひとつの琵琶湖民俗論』と『琵琶湖の民俗誌』の2冊をほぼ同時期に出版なさいます。前者の前半の文章は、昭和30年代に安曇川^{あづまがわ}の公民館の館報に寄稿なさって

※3 水野正好（1934～2015）大阪

市生まれ。考古学者。奈良大学教授、同大

※4 菅沼晃次郎（1927～2017）大

阪府生まれ。民俗学者。滋賀民俗学会事務

※5 網野善彦（1928～2004）山梨

県生まれ。歴史家。著書に『無縁・公界・案』

『日本社会の歴史（上・中・下）』など。

た文章がベースで、非常に文学的、浪漫的な傾向があります。一方、後者は非常に学術的で、どちらにも魅力を感じます。

出版された時期はほぼ同じですが、この2冊は橋本先生の二面性を示していて、おもしろいと思います。

加藤 琵琶湖民俗文化財特別調査には、当時、名古屋大学助教だった歴史学者の網野善彦^{あみのよしひこ}も参加しており、橋本先生との交流が始まっています。

先ほどの『ろくろ』の書評を網野が『民

地域文化向上を目的に県民向けの出版物を

——平成になると、サンライズ印刷出版部（のちのサンライズ出版）では、橋本先生の助言のもと『淡海文庫』を創刊します。

岩根 県の文化振興課の補助を受けて京都のサンブライト出版が発行していた『近江文化叢書』というシリーズが昭和63年（1988）に終了していました。橋本先生は、岡山県の『岡山文庫』や兵庫県の『の

じぎく文庫』のように、地域文化向上を目的とした県民向けの出版物を滋賀県でもつくっていかないといかんとおっしゃいました。著者は探してやるからと。それで、できたのが小社の『淡海文庫』なんです。

平成6年（1994）、一冊目として滋賀県俳文学研究会会長だった乾憲雄^{けんけんお}先生の『淡海の芭蕉句碑（上）』ができました。乾先生が全国滋賀県人会連合会発行の機関誌



『近江の海人 —ひとつの琵琶湖民俗論—』
(第一法規出版、1982年)



『琵琶湖の民俗誌』
(文化出版局、1984年)

具マンズリーに書き、『近江の海人』と『琵琶湖の民俗誌』の献本や資料送付に対する礼状もありました。

米田 網野さんは中世の非農業民として「山の民」や「海の民」に注目した歴史家ですので、橋本先生とは通じ合うものがあったでしょうね。

「全滋連」に連載なさっていたものがちょうどよいというので。一から執筆をお願いするかたちでは、時間もかかりますから。それからは、橋本先生にも著者を2～3人、ご紹介いただいて。

米田 たばこ研究家の大溪元千代^{おおくさ ちよと}さんも？

岩根 そうです。4冊目の『ちよつといつぶく—たばこの歴史と近江のたばこ—』の著者の大溪さんご紹介です。同書には水口煙管^{みづぐち せんくわん}についても書かれていましたね。

ご自身は、別冊淡海文庫というシリーズの一冊目にあたる『柳田國男と近江』を出しになりました。『淡海文庫』は会費をいただいた会員に年3冊配本する形ですが、「あまり売れそうにない本の場合は、著者自身に何百冊か買い取ってもらうって制作費にしなさい。一冊目は自分がつくるから」

とおっしゃって。

—— 岩根社長は、民俗学に関心があったのですか。

岩根 民俗学はあまり関心がないんですけども、いわゆるアンノン族の世代ですから、倉敷民藝館のような場所が好きだったんです。民俗学ではなく、民芸。橋本先生のご自宅へ行くと、民具などが置かれていて居心地のいい場所でした。

米田 高度経済成長から転換して、地方の歴史や文化に若い人も関心を持つようになった時代でした。

岩根 そうそう。白洲正子のな世界です。

加藤 橋本先生は「淡海文化を育てる会」の代表もお務めになったのです。

岩根 当時の稲葉稔知事が「新しい淡海文化の創造にむけて」というスローガンを掲げておられたので、「淡海文化」の語を使いました。最初、橋本先生は「淡海文庫を支援する会」という名称を希望なさっていたのですが、勝手に私が「育てる会」にしてしまい叱られました。それでも了解いただいて初代代表になってくださいました。

いただいたお手紙にも書かれています。が、「行政はいいことばかり言ってます、最後まででは面倒見てくれへんからしっかりせえ」とか、「お金をちゃんと計算せんことには長く続かんよ」とか、かなり現実的なご忠告もいただきました。

米田 橋本先生は行政に対して協力的だった一方で、非常に厳しい視点をお持ちでした。琵琶湖総合開発に対してもですが。岩根 入稿される原稿は几帳面で、修正は原稿用紙の余白に升目の線を引いて書き

※6 アンノン族 1970年代中期から1980年代にかけて、雑誌『アン・アン』や『nonnoo』を片手に観光地に向く女性たちをさした語。

女性たちをさした語。



『別冊淡海文庫1 柳田國男と近江 —滋賀県民俗調査研究のあゆみ—』
(サンライズ印刷出版部、1994年)

加えたり、切り貼りしたりなさるんです。そこまでしてもらわなくてもわかりますと言いたいのを我慢していました。

米田 その几帳面さは残された資料にも現れていました。現地調査に出てご老人などから聞き取ったノート。家に帰ってそれを

丸子船の収集もしくは復元を要望

—— 続いては、橋本先生と琵琶湖博物館の関わりについて、うかがえますか。

加藤 橋本先生は、B展示室にある復元丸子船の建造を要望なさいましたし、展示のコンセプトも、橋本先生がいなかったら、異なるものになっていたでしょう。

開館が平成8年（1996）10月20日で、10月11日に亡くなられているので、県民が来館するところは見ておられません。

さかのぼると、琵琶湖博物館の前に昭和50年代の「幻の民俗博物館」構想と呼ばれるものがあって、昭和56年（1981）に橋本先生は県の地域博物館構想策定委員会の委員になられています。（仮称）びわ湖民俗博物館の基本計画が策定され、翌年には精密な基本計画調査書がまとめられますが、結局事業化はされませんでした。

—— 『柳田國男と近江』には、「関係者にもその経緯は一切報告されることはなかった」と書かれています。

加藤 先の琵琶湖の特別調査と並行して、昭和54年度から県による有形民俗文化財収集調査が始まります。いわゆる「民具」の大規模な収集が行われました。

清書したカード。原稿も下書きから、印刷所からあがってきた初校、再校、念校も全部残してある。念校を束にして自分用につくった本もある。献本した人からの礼状も全部。現地調査先の地図、宿泊した旅館の領収書までそろっている。これには恐れ入りました。

論文や本の制作過程の始まりから終わりで、全部の営為が残っていました。それぞれの過程で橋本先生が何を考えていたのかわかる資料になっています。

当時、廃棄が進む民具を収納する施設を整備するために国が補助する事業があり、滋賀県内では市町単位で10の歴史民俗資料館ができ、県はその中央館としてびわ湖民俗博物館を整備しようとしたわけです。志賀町南小松、安曇川町、守山市、中主町の4か所が建設候補地となっていました。

米田 今の琵琶湖博物館とくらべるとスケールは小さいですが、先生の思いには近い。開発の代償となる博物館には歴史への責任があると考えておられました。

加藤 本当に隔世の感があります。計画だけでも通ったことがすごいと思います。

—— 平成元年（1989）に改めて仮称滋賀県立琵琶湖博物館建設準備委員会ができ、橋本先生はその委員に就任します。

加藤 そこで橋本先生は、丸子船の収集もしくは復元を要望なさいました。本当に宮本常一と橋本先生がいなかったら、琵琶湖博物館に丸子船はなかったと思います。

米田 橋本先生は、宮本常一に会うたびに「滋賀県では、琵琶湖のマルコブネをどうするつもりかいのう」と怒られていたと書かれています。



↑琵琶湖博物館展示の丸子船の進水式においてあいさつする橋本鉄男（大津市本堅田、1995年3月）

「清水の頑鉄」、夫婦で俳句、水墨画は嫌い

—では、橋本先生はどんな方だったか、印象に残っていることはありますか。

米田 橋本先生は柔軟な方……でもありませんが、頑固でしたな。

岩根 頑固でした。

米田 高島郡在住のご縁のあった方々による追悼文集『橋本鉄男先生の思い出』（橋本鉄男先生追悼文集刊行会、1997年）に、兄の清水繁昌さんが書いておられます。父や母が弟のことを「清水の頑鉄」といつて笑っていたと（笑）。講談や浪曲で創作された人物なのですが、国定忠治（くにさだただし）の「清水の頑鉄」という頑固一徹（きつてつ）な俠客（きやく）がいたのだと、ご両親がそう呼んだと。

残された資料を見ていると、絶対に持論を譲らない頑固さがあるんです。

岩根 にこやかな顔をして譲られないんです。怒って譲らないのと違うから、こちらはよけい困るんですよ。

米田 あと、趣味にあたるのですが、亡くなられる直前まで日記に俳句を書いておられましたね。

岩根 『私のトルヌス』の章扉に自作の俳

句がそえてあります。守山市木浜町（このへま）の簀（えび）編（あ）みをする女性たちの写真には、「小春日（こはるひ）や高笑（たかしょう）いつつ簀竹（えびたけ）編（あ）み 六呂（むくろ）。俳号（はいごう）を「六呂（むくろ）」と称しておられました。

米田 奥さんも俳句をやっておられた。岩根 仲がよかったですよ。二人だけの間で一世風靡（ふうみ）する流行語（はうご）があったそうです。加藤 先ほどの『橋本鉄男先生の思い出』に奥さんが書かれた文章には、「ケンケトトン」や「ものいう木」といった言葉をあげて、こんな言葉を私たちはよく使っていたという思い出が書かれています。

米田 そういう文学的センスのある方でした。それを活かして地元北船木の歴史民俗誌（し）として編まれたのが『輪ノ内の昔（くるまのむかし）』でしょう。歴史学者の目からすると、注文もあるかと思いますが、ファンは多いですね。

岩根 絵がお上手だったんです。

加藤 お兄さんも水墨画を描いておられました。

岩根 ただ、橋本先生は水墨画が大嫌

いでした。

ただ、橋本先生は水墨画が大嫌

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

いでした。

※7 山口弥一郎（1902〜2000）福島県生まれ。旧制中学や高校の教師をしながら、東北各地を調査。著書に『津浪と村』。

※8 青木文教（1886〜1956）滋賀県生まれ。僧侶、チベット研究者。チベット国王の許可を得て言語や歴史文化を研究。

だったんですよ。お兄さんが得意気に描いて持ってきたところに隠しておられました。全部見えないところに隠しておられました。

最後に加藤さん、何かございますか。

加藤 今回、米田さんが整理してくださった資料を改めて見て、これは広く世の中に発信していかなければと思いました。同じように地域で活動した民俗学者として福島県の山口弥一郎（やまぐちやよいちろう）が、関西でいえば、橋本先生の資料がそれにあたると思います。橋本先生ご自身も、高島郡常磐木村（としまき）（高島市安曇川町常磐木）出身のチベット研究者、青木文教（あおきぶんこう）を郷土の先覚として顕彰に努められました。

——仏典研究が主流の時代に、サイコロやお守りなど家庭にある日常用具なども収集していたことに共感なさったようですね。

加藤 民俗学は、そもそも柳田自身もそうだったように、アカデミズムとは違う場で育ってきたという面があります。現在、そうした面がなくなりましたが、学問としての衰退の原因の一つかもしれません。

いまの若い研究者たちもそれに気づいているので、最近出た民俗学の教科書は、大学生にはもちろん読んでほしいけれど、一般の人たちにも読んでほしい、その気になれば誰でも民俗学は研究できるはずなのだという立場を表明しており、そうした転換期が訪れそうな気がします。

そのときに博物館がどういう役割を果たせばよいのかも考えていきたいと思っています。——本日は興味深いお話をありがとうございました。（2026.3.3）

『小房見聞録』

おぶさ
さくらがわにしちよう
東近江市桜川西町つれづれ史話

にしだよし
西田善美

（滋賀県東近江市在住）

プロフィール

1946年、滋賀県蒲生郡桜川村（現東近江市）生まれ。1969年、近江酒造入社。現在、取締役顧問。1995年に住民有志で結成した「歴史を誘う会」で活動中。

神社や駅など調査し聞き取り

かつて下小房村、蒲生町、桜川西などと呼ばれた東近江市桜川西町の歴史を、住民有志の「歴史を誘う会」の仲間とともにまとめた。

史料を調べるだけでなく、現場を歩き、住民からの聞き取りを続け、2014年から同町自治会発行の「さくらがわ新聞」で毎月連載。2025年に105回を迎えたのを機に仲間から書籍化を勧められ、自治会が市の補助金を活用して300部を発行した。

読みやすく30項目に再構成

当初はそのまま一冊にするつもりだったが、出版社と相談し、トピックごとに整理して加筆、修正し、順序を入れ替えた。

鎮守の杜や山の神・野の神、明治30年代に近江鉄道桜川駅が開設された経緯、戦後すぐ建てられた高さ12mの火の見やぐら「警鐘臺」、

昭和30年代に賑わった商店街、現在のまちづくりなど、30項目に再構成し、写真も追加した。

他地域からも届いた共感の声

地域の全戸175軒に無料配布し、市内の図書館に寄贈。年配の住民には「懐かしい」と喜ばれ、新たな情報も寄せられた。新聞に取り上げられ、記事を読んだ方から「自分の地元の歴史もまとめてみようと思った」と共感の声も。「各地で同様な『見聞録』が出来て、次代へ伝わるとうれしいですね」連載はまだ続いており、続編と外伝を執筆中だという。

ボンと蹴った小石が太古の矢尻だったり、何気なく座った腰掛けが年代物の石灯籠の基礎だったりします。そんな過去と未知との出会いが日々の生活の中に秘められています。



A5判、総208ページ、並製本、300部発行。
問い合わせは西田さんまで
(TEL 090-5901-5145)

近江鉄道桜川駅での西田善美さん



春季特別展

湖東の近代国語教育史 —河村豊吉と『赤い鳥』—

開催中～5月24日(日)
愛荘町立歴史文化博物館

昭和6年(1931)に愛知川小学校に校長として赴任した河村豊吉は、児童雑誌『赤い鳥』を用いた教育の普及に力を入れ、子どもたちの詩を数多く投稿しました。その詩の多くが特選や佳作に選ばれました。

本展覧会では、河村豊吉が使用した教材や『赤い鳥』、またそこに掲載された子どもの詩を展示し、彼が取り組んだ国語教育について紹介します。

入館料：一般300円、小中学生150円

5月3日(日・祝)～5日(火・祝)は無料

休館日：月・火曜日(祝日は開館)

■学芸員による展示解説

5月17日(日) 11:00～、14:00～

会場：歴史文化博物館 特別展示室

参加費：無料(要入館券)

お問い合わせ先：TEL 0749 (37) 4500

企画展

秀吉と秀長、天下への道のり —兄弟が駆け抜けた激動の10年—

4月25日(土)～6月14日(日)

長浜城歴史博物館

浅井氏との戦い、秀吉の長浜城主時代と中国攻め、そして賤ヶ岳合戦にいたる年月は秀吉と秀長にとって、その後、飛躍していくきっかけとなる重要な10年でした。

本展では、秀吉と秀長の兄弟が駆け抜けた長浜時代の10年にスポットを当て、天下人へと歩いていく2人の事績を、さまざまな資料を通じて紹介します。

入館料：大人1000円、小・中学生200円

休館日：月曜日(ただし、5月4日(月・祝)は開館)

羽柴秀長像 (東京大学史料編纂所蔵模写)

〔前期展示〕(4月25日～5月17日)



■ギャラリートーク

4月26日(日)、5月30日(土)

各回13:30～14:30

会場：長浜城歴史博物館 地階研修室

お申込み：不要(要入館料)

お問い合わせ先：TEL 0749 (63) 4611

春季特別展 安土城築城450年記念

安土山築城前夜 —戦国乱世の城—

4月25日(土)～6月14日(日)

滋賀県立安土城考古博物館



〔初公開〕
江州蒲生郡桑實寺と観音正寺山境論所内清為取替絵図
(教林坊蔵)

安土城は「近世城郭の出発点」として高い評価を受けている城ですが、どうして信長はそのような城を築くことができたのでしょうか。

BOOKS
図書館巡回展

わたしのまちの自費出版

県内の図書館で、滋賀県ゆかりの自費出版物を展示します。あわせて「日本自費出版文化賞」の受賞・入選作品も展示しています。

※手に取ってお読みいただけます。館の所蔵図書のみ貸し出し可能です。

5月1日(金)～31日(日)

高島市立今津図書館

休館日：月曜日、火曜日、第1木曜日(5月7日)

関連の催し

峰守ひろかず講演会

—滋賀の妖怪の特徴と面白さ—

5月9日(土) 14:00～15:30 (開場13:30)

高島市在住の小説家・峰守ひろかずに、『滋賀県妖怪事典』(サンライズ出版)を編む中で発見した、滋賀の妖怪の特徴や面白さについてお話いただきます。

約1時間の講演後、質疑応答&サイン会。

会場：高島市立今津図書館 視聴覚室

料金：無料 定員：80名(予約制、先着順)

申込み：右のQRコードから申込み

主催・お問い合わせ先：

淡海文化を育てる会(サンライズ出版内)

TEL 0749 (22) 0627



滋賀県のみならず、近畿や東海、北陸の各地を代表する城跡の資料を集め、その特徴や共通点から、近世城郭の出発点といわれる安土城に及ぼした影響を考えます。

入館料：大人970円・大学生700円・小中高生420円

休館日：月曜日(月曜日が祝日・休日の場合は翌日)

■関連講座

①「六角氏と観音寺城」

6月6日(土) 13:30～15:00

講師：新谷和之氏(近畿大学)

②「考古資料と歴史史料」

—乗谷・小谷城の文字資料を中心として—

6月13日(土) 13:30～15:00

講師：佐藤 圭氏

(元福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館)

会場：安土城考古博物館 2Fセミナールーム

参加費：500円(資料代)

定員：120名(先着順)

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

滋賀県で大切にすべき野生生物
滋賀県レッドデータブック2025年版滋賀県生きもの総合調査委員会 編
A4判並製本 総696頁 4400円(税込)

5年ぶりの改訂により、絶滅危惧種などカテゴリー別に1575種を収録。2020年版から選定種は60種増加した。50ページ以上のカラーグラビアに約700種のカラー写真を掲載。



継ぎはぎ BOKKO 山の仕事着

写真 辻村耕司／文 横田尚美
A5判並製本 総128頁 3080円(税込)

滋賀県内のある家で「ボッコ」200点近くが見つかった。「ボッコ」とは、古着を継ぎ当てと刺し子で補修し、山仕事に用いたものの通称である。ジーンズにも似た独特の魅力を放つ藍染めのボッコなど、50点余りを紹介。

おとなの総合的な学習Ⅳ
決して子どもに知られてはならない事実奥田守 著
B5判並製本 総102頁 非売品
問合先 東近江市鈴町205(著者)

小学校の社会科郷土学習資料集『わたしたちの東近江市』の改訂委員となった著者が、それにとまなう取材の過程で知った意外な事実10話を収録。(2026.2.7刊)



川柳集 トマト

大西修子 著
B6判並製本 総110頁 非売品
問合先 近江八幡市出町424-17(著者)

長い闘病生活の末に亡くなった友からの「川柳ハガキ」をきっかけに、自身も川柳をつくりはじめた著者が、「毎日新聞」滋賀文芸に掲載された作品50句を収録。(2026.4.10刊)

琵琶湖博物館ブックレット2
湖と川の寄生虫たち 改訂版浦部美佐子 著
A5判並製本 総112頁 1980円(税込)

滋賀県立大学教授の著者が小中学生や一般の人向けに、観察方法と標本の作り方をわかりやすく紹介した入門書。近年飛躍的に増えた研究データなどをふまえた改訂版が刊行。



図解でわかる行政経営改革論

横山幸司ほか 著
A5判並製本 総380頁 2200円(税込)

公会計による財務分析、自治体DX、BPOの推進、公営企業のマネジメント、公有財産・公共施設等自治体アセットマネジメント、地方創生2.0の解説まで、行政経営改革に欠かせない最先端の内容を図解で収録。

おぶさ
小房見聞録
東近江市桜川西町つれづれ史話

10ページ参照

西田善美著／歴史を誘う会編
桜川西町自治会桜川夢プラン委員会発行
A5判並製本 総208頁 非売品
問合先 TEL 090-5901-5145(著者)
「小房」は昭和の合併前の大字名。懐かしい荒物・駄菓子屋、近江鉄道桜川駅、鎮守の森・山の神・野神のことなどを綴る。(2025.12.26刊)

歌集 あかねさす

松岡江威子 著
四六判並製本 総86頁 非売品
問合先 米原市高溝229-31(著者)

夫の三回忌に『挽歌』を上梓して約30年。仕事や子育ても落ち着き、自分と向き合い、再び歌を詠み始めた著者が、新聞等に掲載された作品を収録。(2026.3.11刊)



表紙写真 橋本鉄男撮影

上：麻蒸し桶を囲んで麻の皮をむく女性たち(高島市朽木地子原、昭和30年代)
下：安曇川下流での四つ手網漁(高島市安曇川町北船木、昭和30年)

編集後記 6ページ下に写真を掲載した調査ノートは、橋本鉄男が民俗部門を担当した叡山文化総合研究会編『葛川明王院 葛川谷の歴史と環境』(芝金声堂、1960年)の「木地挽」という節のもとです。同書や『三谷郷土誌』は、国立国会図書館デジタルコレクションの登録利用者になれば読めます。㊦

アンケートのお願い

Duet をより良い情報誌にしていけるために、ぜひ皆さまの率直なご意見・ご感想をお聞かせください。



インターネットでDuetがお楽しみいただけます

<https://www.sunrise-pub.co.jp/about/duet/>